

『^{たんにしょう}歎異抄』のおはなし⑨第七條/第八條
むげ 無礙の一道/自力を離れた^{ひぎょうひぜん}非行非善の念仏

今年は新型コロナウイルスの緊急事態宣言やまん延防止等重点措置発令のため、3月の春のお彼岸法要と7月のお盆法要が中止になったので、昨年11月の報恩講以来、一年ぶりの法話となります。

今回拝読するところは短いので、今日は第七條と第八條のふたつを読みたいと思います。

●第七條

ねんぶつしゃ むげ いちどう
「念仏者は無礙の一道なり。」

「無礙の一道」というのは、何ものにも妨げられない、ただひとすじの道という意味です。

(現代語訳)

〈念仏者は、何ものにもさまたげられない、ただひとすじの道を歩むものです。〉

最初に「念仏者は」とありますが、ここで問題は「念仏者」の「者」という字で、『歎異抄』の一番古い蓮如上人の写本には、確かにこのように書かれているようです。

しかしこの「者」という字はもともと主語、主格を意味するものであり、「何々は」の「は」という言葉が漢字の「者」という字で表されたとする説があります。

それに従うと、これは「念仏者は」ではなく「念仏は」と読むべきであるということです。写本によっては、実際にそのように書かれたものもあるようです。

「無礙の一道なり」という述語であるなら、主語は「念仏は」であるべきで、そうすると、「念仏は妨げのない一道である」として、主語と述語がうまく対応して、意味がすっきり通るというのです。

しかし、この次の第八條の冒頭は「念仏は」になっており、そこに「者」の字はなく、主格を表すのに、第七條と第八條とでは違う書き方になっていて不自然です。

「念仏者は無礙の一道なり」という一文を、意味の上から素直に読み取れることも確かですが、やはり人が道であるという、おかしい日本語になってしまいます。

しかし『歎異抄』の場合、文字面だけを取って、文法的におかしいことをあまり言うのは問題ではないかと思います。『歎異抄』には、矛盾するような表現が時に見られることがあるのですが、そ

れでもそこには深い真実が述べられています。

ここでは一応、「念仏者は無礙の一道を歩むものです」と解釈するのがいいように思います。

念仏者とは、阿弥陀如来にすべてをお任せした人であり、その人こそはまさに無礙の一道を歩むもののなのです。

親鸞聖人が「無礙の一道」と言うとき、私たちの頭には、「二河白道の^{にがびやくどう たと}喩え」が浮かんできます。前回の報恩講の時にも二河白道の話が出ましたが、親鸞聖人はこの物語を念頭に置きながら、「念仏者は無礙の一道なり」と述べたのではないかとする説があります。

ある人が東から西の方に向かって歩いていると、眼の前に河が現れ、北の右側には水の激流があり、南の左側には火が激しく燃えているのです。後ろからは、盗賊や猛獣、毒蛇が襲い掛かろうとしています。行くも死、帰るも死、とどまるも死のピンチです。ふと見ると、眼の前に白い小さな道が、激流と猛火の間にありました。幅4～5寸といますから10数センチくらい、長さ100歩の狭い道です。この状況を突破するには、この白い道を歩むほかないと、この人は考えました。すると東の岸から、「決心して、その道を行きなさい。死ぬようなことはありません。しかしそこにとどまっていると死ぬでしょう」という声が聞こえました。すると西の岸からも、白い道の向こうから声が響いてきました。「一心に信じて、すぐにこちらへ来なさい。私があなたを^{まも}護ってあげましょう。火の河、水の河に落ちることを恐れてはなりません」と。旅人は決心して、その白い道を歩き始めました。少し行くと、背後から声がしました。「早く引き返しなさい。その道は險悪で通れません。行けば死ぬでしょう。われわれは、おまえを殺したりはしない」というのです。これは盗賊や猛獣、毒蛇の声でした。しかし旅人はその声に耳を貸すことなく白道を歩み、無事に西の岸にたどり着くことができ、^よ善き友たちと逢うことができ、喜びと楽しみでいっぱいになったそうです。

東の岸はこの娑婆世界、濁りに濁った人間社会のことで、西の岸は極楽浄土です。盗賊や猛獣、毒蛇は、旅人の心の中にある煩惱を意味します。火の河は自分にひそむ^{しんぞう しんに}瞋憎（瞋恚＝怒りや憎しみ）、水の河は自分の中に湧き上がる^{とんあい とんよく}貪愛（貪欲＝欲望）を表しています。白道は、そんな人間の心の中にも存在する清らかな心のことです。

また「行きなさい」と言った東岸の声は、お釈迦様です。「来なさい」と言った西岸の声は、阿弥陀仏が浄土から呼びかけた声です。

ですからこの「無礙の一道」とは、煩惱がせめぎ合う^{はざま}狭間に開かれた狭い道ということになるでしょう。その道を歩むのは危険なことではありますが、そこに行くことによってのみ、人々は真に救われるのです。

この困難な道を選び、そこをひたすら歩む決意が念仏者を無礙の一道に導くのですが、その決意は決して主体的なものではなく、東岸と西岸からの声、お釈迦さまの勧めと阿弥陀様の本願力とによ

って、すなわち自力によってではなく仏様の力を受けた他力によるものなのです。
絶体絶命の困難な状態から、すべてを投げ出して仏様の声に従うことによって、何ものにも妨げられない道を歩むことができるのです。

◎念仏を称える人には、どんな利益があるのか？

「そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。」

「信心の行者」というのは阿弥陀仏の救いを信じて念仏する人のことで、「念仏者」と同じ意味ですが、この場合は、念仏を称える人の内面性をより強調していると思われます。

「天神・地祇」は、梵天・帝釈天・四天王・吉祥天などの天の神、堅牢地神・八大竜王などの大地をつかさどる神のことです。

「敬伏」とは、うやうやしく従うことです。

「魔界・外道」ですが、魔界は悪鬼・天魔（仏道の妨げをなす魔王）の横行する世界で、冥界（眼に見えない死者の世界）で仏法を妨げるもののことです。外道は仏教以外の宗教で、これも仏法を妨げるもののことです。お釈迦様の時代には六師外道とって、95種の外道があったそうです。「障礙」は、さまたげる、という意味です。

（現代語訳）

〈それはなぜかという、阿弥陀如来の本願を信じて念仏する人には、天の神・地の神が敬ってひれ伏し、悪魔や邪教を信じるものも、念仏者をさまたげることはありません。〉

親鸞聖人は「浄土和讃」の中にある「現世利益和讃」で、次のように書かれています。

「南無阿弥陀仏をとなふれば 梵王帝釈帰敬す 諸天善神ことごとく よるひるつねにまもるなり」

〈南無阿弥陀仏を称えると、仏法を守護する神である梵天王と帝釈天も帰依し敬うのです。その眷属（仏・菩薩につき従うもの）である無量の善い神々もみな、昼夜を問わず常に護ってくださるのです。〉

「南無阿弥陀仏をとなふれば 堅牢地祇は尊敬す かげとかたちのごとくにて よるひるつねに

まもるなり」

〈南無阿弥陀仏を称えると、大地の神々も^{とうと}尊^とび敬うのです。影が常にものの形に添うように、昼夜を問わず常に^{まも}護^もってくださるのです。〉

浄土真宗では基本的に現世利益はあまり説かないのですが、親鸞聖人は「^{げんぜりやくわきん}現世利益和讃」で、現世利益について書かれています。「現世利益和讃」の15首のうち9首が「南無阿弥陀仏をとなふれば」で始まり、お念仏を称える利益が書かれています。

南無阿弥陀仏のお念仏を称える身になると、梵天王、帝釈天も帰依し敬うようになり、眷属の神々からも守られ、大地の神々も尊^とび敬^とい、夜も昼もいつも守^もってくださるといいます。

「^{てんじんちぎ}天神地祇はことごとく ^{ぜんきじん}善鬼神となづけたり これらの^{ぜんじん}善神みなともに 念仏のひとをまもるなり」

〈天地の大いなる神々は、みな善鬼神と申し上げます。これらの善い神々はみなともに、念仏する人を^{まも}護^もってくださるのです。〉

親鸞聖人は、天地に満ちているといわれるこれらの善い神々が、念仏する人を護^もってくださると言っているのです。

「^{がんりきふしぎ}願力不思議の信心は ^{だいぼだいしん}大菩提心なりければ 天地にみてる^{あくきじん}悪鬼神 みなことごとくおそるなり」

〈思いはかることのできない本願のはたらきによる信心は、大いなるさとりを求める心でもあるので、天地に満ちている悪鬼神が、みなそろって^{おそ}畏^それるのです。〉

阿弥陀如来の願力すなわち本願力というのは、すべての人が幸せであってほしいと願う慈悲心です。不思議は不可思議のことで、思議できない、思いはかることができない、という意味です。それをいただいた信心は大菩提心といって、人間が起こした自力の菩提心とは異なり、仏様の心が人間の中にはたらき出たものです。

ですから菩提心と言っても自分が自力で起こした心ではなく、仏様からたまわった菩提心が、大菩提心です。

そしてお念仏の信心が深まってくると、これまでは悪鬼神に囲まれていたと感じていた心境が転じられて、悪鬼神も悪さをしなくなり、それらもみな念仏者を畏^{おそ}れるようになるというのです。

「^{ざいあく}罪^{ごうほう}悪も業報を感ずることあたはず、^{しよぜん}諸善もをよぶことなきゆへに^{むげ}無礙の一道なりと、^{うんぬん}云々。」

「業報」というのは、過去の行為の^{むく}報いという意味です。

(現代語訳)

くまた、どのような過去の^{ざいあく}罪悪もその^{むく}報いをもたらすことはできず、どのような^{ぜん}善も念仏の善には及びません。ですから念仏者は、何ものにもさまたげられない、ただひとすじの道を歩むものなのです。

このように聖人は仰せになりました。〉

「仏の三不能」といわれるものがあります。これは「①縁のない衆生は度し難い」「②すべての衆生を救い尽くすことはできない」「③因果の道理を変えることはできない」という三つです。

ですから^{いんが}因果の道理というものは、仏様といえども変えることができません。

「業報を感ずることあたわず」というのは、過去の行為の報いも「感じられることがない」ということです。

業の報いを「全くなくしてしまう」というのでは、どんなに悪いことをしても報いを受けることがないので、何をしてもよい、という造悪無礙になってしまいます。

因果の道理は変えられませんから、ここで業報を全くなくしてしまうと書かれていたなら、それは間違いです。そう言わずに、「感ずることあたわず」と言われたところが大切です。

ですからこれは、信心の行者である念仏者には、過去の罪悪の報いも、そのままその人に襲い掛からず、感じられることがなくなる、ということだと思えます。

他力の念仏を称えると、どれほど罪深い私たちであっても西方浄土に往生することが定まるので、念仏者が過去に行った悪の行為もその報いを感じられることはなく、悪も往生の妨げとなることはない、ということです。

●第八条

◎念仏とは、どういう性格のものであるか？

「念仏は^{ぎょうじゃ}行者のために^{ひぎょう}非行・^{ひぜん}非善なり。」

「行者のために」というのは、ここでは念仏を行ずる立場の人から見れば、という意味です。
「非行・非善」は、自分が修める行でもなければ、自分が積む善行でもない、ということです。

(現代語訳)

〈念仏は、それを称^{とな}える人にとって、修行をすることでも、また善行をなすことでもありません。〉

「行」というのは、行為や修行という意味で、「善」は善根功德、あるいは一般に良いと思われる道徳的・倫理的な行為です。

すると非行=行ではない、非善=善ではないというのは、どういうことでしょうか。

これは自分のはからい、自分の力で行なわれる行や善ではないということであり、念仏は、称える者にとって修行でもなければ、善根功德でもないのです。

念仏は他力廻向すなわち阿弥陀如来から賜ったものであり、私のはからいや自分の能力で称えるわけではないので、衆生の側から見れば「非行」であり「非善」なのです。

◎ 自分のはからいではない念仏とは？

「わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。」

(現代語訳)

〈念仏は、自分のはからいによって行うのではないから、非行（行ではない）というのです。〉

普通は、念仏をわがはからい、自分のはからいだと思って称えているわけです。

自分の気が向いて、自分が称えようと思うから念仏を称えているのであって、自分が称えているのに、自分のはからいではないというのは、簡単にはなかなか理解できないかもしれません。

自分のはからいではない念仏とは、人間の智慧を超えた不思議な存在（=仏）からの働きかけがあって、そしてこれまでに逢った方々や祖先や両親等からのいろいろなご縁があって、そうした存在から、お念仏を称えるように仕向けられているのです。

それが他力の念仏であり、自分の力で称えているのではないのですから、「非行」というのです。

「わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。」

(現代語訳)

〈また念仏は、自分のはからいによって^{つと}努める善でもないから、非善（善ではない）というのです。〉

お念仏を称えて、自分はいいことをしたと思いがちですが、それは本当の他力の念仏ではありません。

念仏は自分で行なう善行、善根^{ぜんこんくどく}功德ではなく、阿弥陀仏のはたらきによる善なので、自分で行なう善ではなく、「非善」であると、親鸞聖人は言われるわけです。

「ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行・非善なりと、云々。」

「他力」とは、阿弥陀仏がすべての生きとし生けるものを救おうとするはたらきのことです。

（現代語訳）

〈念仏は、ただ阿弥陀^{あみだぶつ}仏の本願^{ほんがん}他力^{たりき}のはたらきによるのであって、自力^{じりき}のはからいを^{はな}離れているから、それを称える念仏者にとっては、非行・非善（行でもなく善でもない）なのです。このように聖人は仰せになりました。〉

◎本当の他力の念仏とは？

お念仏は、ひとえに阿弥陀仏の他力すなわち本願のはたらきによって称えられるのであり、阿弥陀様のお力のあらわれです。

他力のお念仏は最高の行であり、最高の善でもあります。

それは阿弥陀仏からたまわったものですから、念仏者のはからいで、頑張って厳しい修行をしたり、善行、善根^{ぜんこんくどく}功德を積み重ねたりする必要はありません。

自分の意志で念仏するのではなく、あくまでも阿弥陀仏の本願力、すなわち仏様のお力によって念仏させていただくのが、本当の他力のお念仏です。

自分というのは、ある意味で入れ物にすぎず、エゴ、我、我執を空っぽにして、自力、自分のはからいを離れると、そこに仏様の他力がおのずからはたらき出てきます。

ですから念仏とは阿弥陀仏の大きなはたらきかけによって、自然と発せられるものなのです。

自分中心のとらわれを離れて、すべてを阿弥陀如来にお任せするので、他力念仏とは仏様の行、仏様のはたらきなのです。

ですから念仏は自分が行う修行でもなく、善行でもない、「非行・非善」というわけです。

次回は、新型コロナの第六波で緊急事態宣言等がまた出されない限りは、来年3月の春彼岸の時に第九条を拝読したいと思います。

第九条は少し長いので、二回に分けてお話するかもしれません。

本日もご清聴いただき、ありがとうございました。